

令和 3 年 6 月 15 日現在

機関番号：13401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2020

課題番号：18H06342・19K21425

研究課題名(和文) 医療的ケアが必要な子どもの親における災害への備えとその関連要因の検討

研究課題名(英文) Examining disaster preparedness and related factors in parents of children in need of medical care

研究代表者

高村 理絵子 (Takamura, Rieko)

福井大学・学術研究院医学系部門・助教

研究者番号：00824202

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、年々増加している医療的ケアが必要な子どもの親が行っている災害への備えの現状と災害への備えの認識、それに関連する要因を検討した。災害への備えを行っている医療的ケアが必要な子どもの親は半数以下であった。親の持つ災害への備えの認識では、『今までどうにかしてきたので災害時でもどうにかなる』、『備えなくても自分の子どもは優先してもらえる』など多くの親が災害への備えの認識がなかった。一方で、災害への備えを実施している親のみ『自分が守らないと災害時助からないかもしれない』など災害への備えの認識を持っていた。その認識には[きょうだい][長い療養期間][人工呼吸器][寝たきり]が影響していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、医療的ケアが必要な子どもと家族が災害時における包括的支援プログラム開発の第一段階として、災害への備えの実態と認識、それに関連する要因を明らかにすることであった。本研究結果を基に災害に備えるための現実的で効率的な支援方法を検討し、医療的ケアが必要な子どもとその家族の災害への備えにつながるよう研究を進める必要がある。

研究成果の概要(英文)：In this study, we examined the current state of disaster preparedness, awareness of disaster preparedness, and factors related to disaster preparedness, which are being implemented by parents with children who need medical care, which is increasing year by year. Less than half of parents of children in need of medical care were prepared for a disaster. Many parents were not aware of disaster preparedness, such as "I have managed to do something so I can prepare for a disaster" and "Children are prioritized without preparation". Only parents preparing for a disaster were aware of disaster preparedness, saying, "If you do not protect yourself, you may not be able to help in the event of a disaster." [Siblings], [Long treatment period], [Ventilator], and [Bedridden] affected cognition.

研究分野：生涯発達看護学関連

キーワード：医療的ケアが必要な子ども 親 災害の備え 関連要因

1. 研究開始当初の背景

近年、小児医療技術の進歩により、自宅で人工呼吸器、吸引、経管栄養など医療的ケアを必要とする子どもが急増している。東日本大震災時、医療的ケアの必要な子どもを含む障害者の負傷者は、障害のない子どもの2倍以上であった¹⁾。医療的ケアの必要な子どもは避難する為の準備が十分にできておらず、避難できぬまま自宅で命を落としたり、避難はできても医療機器が使えず困惑したケースも報告されている²⁾。災害はより脆弱なところへ付け込むため、近い将来にも災害発生の切迫性が指摘されている我が国において、医療的ケアの必要な子どもとその家族へ備えを促し災害時における防ぎえた死を減らすことは危急的課題である。

災害への備えには、自分の命は自分で守る「自助」、近隣住民やボランティアによる「共助」、国や地方自治体が行う「公助」が3本柱となる。2016年より厚生労働省が、妊婦や乳幼児、治療の必要な子どもを対象に災害時も継続して医療が提供されるよう調整する災害時小児周産期リエゾンの育成を開始したが、現時点では自宅で過ごす医療的ケアの必要な子どもへの体制は整備されていない³⁾。災害時、大きな役割を果たすのは、地域住民自身による自助と地域コミュニティにおける共助である⁴⁾。しかし、災害時を想定した薬や衛生材料のストック、医療物品のメンテナンス会社や医療施設との連絡方法、近隣住民と協力した避難方法の検討など実際に備えている親は全体の半数以下である⁵⁾。十分な備えに至らない要因には、災害や備えに関する知識不足があることが指摘されてきたが⁶⁾、知識の提供やリスクが迫ってくるという情報を伝えるといった恐怖喚起だけでは備えに必ずしも結びつくとは言えず、備えを行動化するためには方略が必要である⁷⁾。方略を導き出すためには、医療的ケアを必要とする子どもの親が、災害への備えをどのように認識しているのか、その認識と備えの関連の理解が不可欠であるが、十分に把握しているとは言い難い。

そこで、今回、医療的ケアを必要とする子どもを持つ親が行っている備えの現状、災害への備えをどのように認識しているのか、備えに結びついたあるいは結びつかなかった要因を明らかにする必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、医療的ケアを必要とする子どもの親が行っている備えの現状、災害への備えの認識、災害への備えの関連要因を明らかにすることである。これらを明らかにすることで、医療的ケアを必要とする子どもの親の災害への備えを促す方略の示唆を得ることができるという意義がある。

3. 研究の方法

(1) 研究対象者

研究対象者は医療的ケアの必要な子どもの親であり、調査協力に同意した人とした。

(2) 調査期間

調査期間は、2018年11月～2019年4月であった。

(3) データ収集方法と分析方法

データ収集は、インタビューガイドを用いた半構造化面接で行った。質問内容は、親の背景、子どもの背景、周囲のサポート状況、社会資源の活用状況、災害体験の有無、災害への備えの状況、災害を行った際の状況、備えを行わない理由、備えに関する思い・考えであった。面接は1回40分から60分程度とし、原則1回のみとした。得られたデータより逐語録を作成し、「災害」と「備え」、そしてそれらへの「認識」が表れている箇所すべてを抽出しコード化し、「備えの現状」、「備えへの認識」それらの関連性を意識し帰納的プロセスを辿り類似するものをカテゴリー化した。

(4) 倫理的配慮

研究協力の得られた訪問看護ステーション、在宅療養支援診療所の看護職により、医療的ケアの必要な子どもの親に対して、研究の説明の了承が得られたのちに紹介が行われた。研究者は、研究の趣旨、研究参加の自由意志と利益、プライバシーの保証、研究データの処理と保管、公表範囲などについて研究対象者へ文書と口頭で説明し、文書で同意を得た。なお、本研究は福井大学医学系研究倫理審査委員会の承認を受け実施した（承認番号 20180094）。

4. 研究成果

研究対象者は30～40歳代の女性7名であった。在宅療養期間は数か月～16年であり、医療的ケア内容は経管栄養（5名）、吸引（5名）、人工呼吸器（1名）、人工呼吸器使用歴あり（3名）、気管切開（1名）、在宅酸素療法（1名）であった。インタビューの実施時間は平均52分であつ

た。『 』はカテゴリーを示す。

(1) 災害時の備えの現状

表1 災害への備えの現状

災害への備えを行っている医療的ケアの必要な子どもの親は7名中1~2名であった(表1)。しかし、未実施と答えた親も、災害発生を想定して行ってはいないが、医療物品は『予備として多めにもらっている』、『すぐに持ち運べる状態にしている』、子どもの『関係各所に分割して置いてある』状態にしていた。

対策内容	実施	未実施
医療物品の備蓄	2名	5名
医療機器の電源への対策	2名	5名
避難方法の検討	2名	5名
人との関係づくり	1名	6名

(2) 災害への備えの認識

災害への備えの認識では、6つのカテゴリー、15のサブカテゴリー、48のコードが抽出された(表2)。『災害への備えは必要ではない』、『災害への備えよりも優先すべきものがある』、『今までどうにかしてきたので災害時どうにかなる』、『備えなくても自分の子どもは優先してもらえる』と多くの親が災害への備えの認識がなかった。その背景には、備えたところで役に立つのかといった無効感、家事・育児・ケアの時間に追われ備えることの煩わしさを感じ、行政や病院がどうにかしてくれるといった依存感があり、備えをしなくとも何とか生き延びることができるだろうといった認識となっている。したがって、備えの認識を持つためには、災害時に子どもに起こりうる状況を思考し、具体案を経験豊富な親から伝授できるような機会を設けることが備えの実施に結び付くと考える。

また、災害への備えを実施していると答えた親3名のみ『自分が守らないと災害時助からないかもしれない』、『自分一人ではこの子を守れない』と災害への備えの認識を持っていた。また、それらは[きょうだい][長い療養期間][人工呼吸器][寝たきり]が災害への備えの認識に影響していた。

表2 災害への備えの認識

(3) 今後の課題

きょうだいや長い療養期間、重症度の高い自分の子を通しての経験が、災害への備えの認

カテゴリー	サブカテゴリー
災害への備えは必要ではない	今まで災害を意識して考えたことがない
	災害に備えないといけないという緊迫感がない
	災害への備えを現段階でやる必要性を感じない
	災害を自分の身近なものと思っていない
災害への備えよりも優先すべきものがある	災害への備えよりも日常起こりうるトラブルへの対応の方が必要である
	今の状態や生活を維持することで精いっぱいである
今までどうにかしてきたので災害時どうにかなる	今までどうにかしてきたので災害時どうにかなる
備えなくても自分の子どもは優先してもらえる	備えなくても優先して対応してもらえる
	避難所では対応できないのでとりあえず病院へ行けば何とかしてもらえる
自分が守らないと災害時助からないかもしれない	きょうだいの防災訓練でこの子のことを真剣に考えないといけない
	この子はそのままでは災害時何とかならないかもしれない
	長い療養期間の中でどうにもならないことも経験し周りは当てにできない
自分一人ではこの子を守りきれない	災害時は周りの人を当てにできないので自分の子は自分で守らないといけない
	備えとして駆け付けられる場所、助けてくれる人を増やしたい
	人工呼吸器を持って寝たきりの子どもを抱えて一人で避難することはできない

識に影響している可能性があるが、今回の研究では、示唆にとどまった。今後、関連要因として抽出されたきょうだいの有無、療養期間、重症度と災害への備えについて質問紙調査を実施し、医療的ケアが必要な子どもと親の特有の要因と備えの関連性について検討する。

<引用文献>

- ① Tanaka S (2013): Issues in the support and disaster pre-paredness of severely disabled children in affected areas, Brain & development, 35, 209-213.
- ② 河北新聞, 2012年9月24日
- ③ 伊藤友弥, 岬美穂, 賀来典之他(2017): 災害時小児周産期リエゾンという新たな災害支援, 小児科学会雑誌 121 (8), 1397-1404.

- ④ 小原真理子 (2017) : 災害時の要配慮者への対応と地域コミュニティの課題, コミュニティケア 19 (13), 18-25.
- ⑤ 寺門通子, 高木典子 (2012) : 医療的ケアを必要とする小児の災害の備え—災害時の備えに対する意識調査—, 茨城県立医療大学附属病院研究誌 15, 13-17.
- ⑥ 南裕子, 山本あい子編 (2007) : 災害看護学習テキスト概論編, 日本看護協会.
- ⑦ 海上智昭, 幸田重雄, 岡村信也他 (2012) : 自然災害リスク対策行動の難しさに関する態度研究に基づく論考, 愛知工業大学研究報告 47, 59-67.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高村理絵子
2. 発表標題 医療的ケアの必要な子どもの親における災害への備えの現状と認識
3. 学会等名 日本看護技術学会学術集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------